

平家物語と日本語史

吉田 永弘

はじめに

平家物語には、源平盛衰記や源平闘諍録のように異なった題名を冠しているものも含めて、多様な諸本が見られる。それらの諸本のなかで鎌倉時代語の資料として採るべきものは、延慶二―三年（一三〇九―一〇年）という唯一鎌倉時代の奥書を持つ「延慶本」だけであるとしたのは山田孝雄「一九一四」である。確実に成立年代がわかっている資料を重視したのは正当な判断であるが、延慶書写の本文が現存しないため、江戸時代の写本に依拠したところに日本語史の資料としての限界があった。^{註1}その後、室町時代の応永二十六―二十七年（一四一九―二〇年）書写の「延慶本」が出現したが、延慶書写本とどの程度一致するのかわからない。また、鎌倉時代の奥書を持つ他の平家物語が発見されたということもない。つまり、平

家物語には鎌倉時代書写の本文が現存しないという点では、一世紀前の山田孝雄の頃から状況が変わっていないのである。

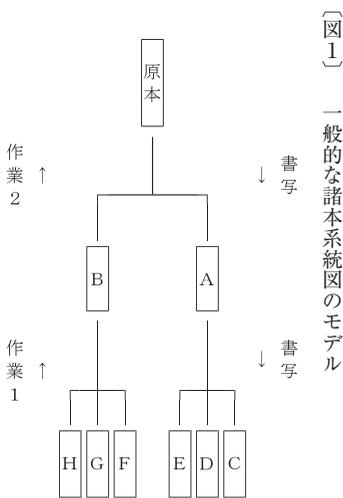
平家物語それ自体の言語の研究を行う場合や漠然と幅を持たせた中世資料として扱う場合ならともかく、歴史的な展開を描く場合には、平家物語を中世のどの時点の言語事象を持つ資料として扱うことができるか、その資料性が問題となる。そこで本稿では、平家物語を日本語史の資料として扱う場合、どのような点に留意しておけばよいのか検討してみようと思う。まず、第一節で文献学的研究の結果をどのように受け止めるのがよいか確認し、第二節で日本語史の資料としての扱い方を考察する。それを踏まえて、第三節では平家物語諸本間の言語事象の差異に着目して資料性を検討する。最後に第四節で、天草版平家物語を原拠本に近いとされる斯道本平家物語と対照して日本語の変化を描く研究方法の在り方を考察する。

本稿で使用するテキストは稿末に掲げる。また、引用に際して手

を加えたところがある。

第一節 平家物語諸本の捉え方

一般の古典文学作品は、原本が失われて複数の写本・版本が残されている。文献学的研究では、残された写本・版本は原本からの書写過程における本文の混乱したものと考え、現存する写本・版本を校合することによって原本の復元を目指している。これをモデル化して示すと〔図1〕のようになる。



〔図1〕では、原本からA Bという本文が生まれ、AからC D E、BからF G Hという本文が生まれている。仮に、CとHが現存し、すべての本文が異なっている場合、まず、原本からの書写過程で本文の異なりが生じたと仮定して、本文の近いものをグループにしていくことになる。その場合、CとEを一グループとしてAという想定本文を考え、FとHを一グループとしてBという想定本文を考える。その上で、AとBを比較して、原本を復元するという手続きになる。現実にはさらに複雑な様相であり、原本の復元は無理であることがほとんどであるが、考え方は以上のようなものだろう。

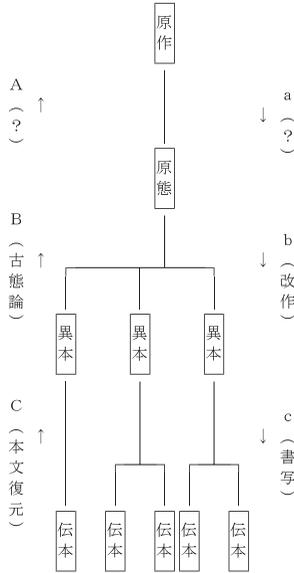
一方、平家物語の諸本の異なりは多様で、〔図1〕のモデルで説明がつかない部分がある。

例えば、灌頂巻に応安四年（一三七一年）の覚一の署名のある龍谷大学本・高野本・高良神社本の校合によって、応安四年に作られた本文（「覚一本」）は想定できるが、想定された「覚一本」と「延慶本」とは、語り本系と読み本系という平家物語諸本の最初の二分法によっても分けられる通り、書写過程における本文の混乱とは捉えられないほど本文が異なっているため、校合してその元になった本文を想定することはできない。

このような平家物語諸本の在り方のなかで、佐伯真一〔一九九六〕は、平家物語の古い形態を探る古態論の観点から、平家物語の多様

な諸本を二元的な書写過程で捉えるのではなく、作られた本文と写された本文という二元的な捉え方をする必要性を指摘している。作られた本文を「異本」と呼び、写された本文を「伝本」と呼んで、〔図2〕のようなモデルを掲げている。

〔図2〕 古態論のモデル（佐伯真一「一九九六・一九頁」による）



「伝本」は具体的に残っている本文で、「異本」を校合することに よって「異本」を復元し、「異本」相互を比較して原態を探るという 手続きになる。例えば、龍谷大学本・高野本・高良神社本などの「伝 本」の校合によって「寛一本」という「異本」を復元した上で、「延 慶本」や「屋代本」などの他の「異本」との比較によって原態を探 るというのが古態論の方法である。

日本語史の研究においても、古態論のモデルを踏まえて平家物語 を扱っていく必要がある。ただし、古態論の目指すところと日本語 史研究の目指すところの違いに留意しておかなければならない。 古態論は古い姿を留めているところに重きを置き、日本語史研究は 言語資料としての価値に重きを置く。内容の古さと言語事象の古さ は同じではなく、内容としては古態を留めるけれども言語的には新 しいという場合が想定できるので、それぞれの立場からの資料価値 は異なる。鎌倉時代に遡る内容であることは鎌倉時代の言語である ことと一致しないのである。したがって、古態論の成果をそのまま 受け入れて、或る「異本」が鎌倉時代の内容を留めているという理 由で、その「異本」を鎌倉時代語の資料として採用することはでき ない。この違いを認識した上で、日本語史の資料としてどのように 扱っていくのがよいか次に考察していく。

第二節 日本語史の資料としての扱い方

〔図2〕の古態論のモデルを踏まえると、平家物語を日本語史の 資料として扱う場合に、どの時点の言語資料として扱うか、次の三 つの場合が考えられる。

I 〈異本〉以前の「原作・原態」の成立時の資料

II 〈異本〉の成立時の言語事象を含む資料

III 〈伝本〉の成立時の言語事象を含む資料

改作による成立が〈異本〉で書写による成立が〈伝本〉であるから、IからIIへの言語事象の異なりは大きく、IIからIIIはそれに比べて小さいことが推測される。

平家物語を日本語史の資料として用いている場合、どの時点の資料として見ているのか曖昧な場合が多い。多くは、IかIIとして扱っているようである。IIIとして扱うことは少ないようであるが、次に挙げる日本古典文学大系（岩波書店）の解説の記述は高良神社本という〈伝本〉を採り上げてIIIを問題としている。

この大系本は、振仮名を除いた部分は、龍大本を底本としているが、その仮名遣は、この本文に見られるように、歴史的仮名遣がかなり見事に守られている。（中略）この大系本の振り仮名は、主として高良神社本の振仮名であるが、これはかなり問題を含む。標準的な歴史的仮名遣に比べると、ア行・ワ行・ハ行の区別、開合の区別にも乱れが多い。（上巻解説、二四頁）

このテキストは、「覚一本」という〈異本〉の復元を目指したものだ。まずはこのように〈伝本〉の校合によってIIIの可能性を排除していく必要がある。その上で、IIの〈異本〉成立の応安四年（一二七一年）頃の言語事象を含む資料として扱うことができるのである。さらに遡って鎌倉時代語資料として扱う場合がIであるが、この立場は、「原作・原態」成立時を想定し、その本文が変わらないことを前提としない限り成り立たない。したがって、無条件に十三世紀前半の言語資料として扱うのは危険である。この立場の多くは、平家物語諸本を〔図1〕のような系統関係として捉えているように思われる。

『日本国語大辞典 第二版』（小学館）は、用例を採用する基準に、「その語、または語釈を分けた場合は、その意味・用法について、もっとも古いと思われるもの」を挙げているところから、語や意味の初出を探る際に真っ先に参照され、強い影響力を持つ辞典であると思われるが、年代注記に関しては「出典の成立年、または刊行年をできるだけ示す。正確な年次のわからないものについては、大まかな時代区分で示したものもある。また、成立年に関して諸説あるものについては、一般に通用しているものを一つだけ示す。」とあり、「覚一本（龍谷大学本・高野本）」は「屋代本」「平松家本」とともに「十三世紀前半」とされてIとして扱われており、問題を含んでいる。

その一方で、「延慶本」は「二三〇九—一〇」と記され、〈異本〉成立時のⅡとして扱われている。

Ⅱの〈異本〉成立時の言語事象を含むものとして扱うことができるのは、「覚一本」のように〈伝本〉が複数あり、〈異本〉を復元することができるときでないと難しい。ⅡからⅢの言語事象の異なりは小さいとは言っても、一つの〈伝本〉しかない場合は注意を要する。

「延慶本」は既に述べたように延慶書写本（二三〇九—一〇年）は現存せず、応永書写本（一四一九—二〇年）が現存する。その応永書写本も延慶書写本の忠実な写しとは言えず、覚一本的な本文の影響を受けた箇所があることが櫻井陽子「二〇〇一」によって明らかにされた。言語事象に関しても、応永時点での言語事象が反映する可能性はあると考えるのが自然である。最近の研究では、その可能性を踏まえた上で扱っている。小川栄一「二〇〇八」は表記・音韻・語法の検討によってⅡの言語資料として扱ってよいことを述べている。その一方で、山本真吾「二〇一〇」は新しい語法のタシ・バシが源平盛衰記・長門本と比べて延慶本独自の本文に偏るところからⅢの時点での言語事象の混在を指摘している。

「屋代本」は「語り本の古態を示す」（『日本語学研究事典』明治書院、二〇〇七、八二—四頁）と言われることが多いが、奥書がなく

〈異本〉成立時が不明である。現存の〈伝本〉の書写年代は山田孝雄「二九一五」による応永頃書写説があるものの、確かなことはわからない。したがって、Ⅲの検討を加えることは不可欠となる。ちなみに、現存伝本の書写年代は十六世紀までくんだり（吉田永弘「二〇〇二」）、全巻が等質ではなく、別筆の巻十一は他の巻より新しいところがある本文だと思われる（吉田永弘「二〇一〇」）。

要するに、「延慶本」「屋代本」のように、実質的に〈伝本〉が一本しかない場合は直ちにⅡとして扱うのも問題があり、Ⅲの検討を加えた上で扱う必要があるのである。Ⅲの検討を加えずにⅡの資料とは扱えない。ましてやⅠの資料として扱うことはできない。

ただし、Ⅲの〈伝本〉成立時の言語事象が反映した箇所を指摘するのは容易ではない。〈伝本〉成立時に言語の改変があったとしても、ⅠⅡの時点には存在しなかった言語事象が見られる場合でないと指摘しにくい上に、中世前期は資料の制約があり、ⅠⅡの時点には存在しなかった言語事象であると判断するのも難しいからである。そこで、新しい言語事象の指摘の他に、〈異本〉間の言語を比較して相対的な新旧を測る方法が、どの時代の言語事象が反映しているかどうかの判断材料として有効であると思われる。^{註2}

第三節 〈異本〉間の差異

古態を示すと言われる「屋代本」「延慶本」は、Ⅲの検討が欠かさない資料であることを右に見た。本節では、この二つの〈異本〉に「覚一本」を加えた三本の間で差異が見られる事例を挙げて、どの時点の言語事象の問題なのか考察を加えていく。

三・一 「氏種姓」

まず、「屋代本」の事例から見る。「屋代本」には用例Ⅰのように「氏種姓」の例がある。

1 為義是ヲ聞テ、氏種姓ハ知ネトモ甲斐ノシゲナリ。(屋代本、
劍巻・上、15ウ)

『日本国語大辞典 第二版』の「うじしゅじょう【氏種姓】」の項は、用例Ⅰの「屋代本」の例を初出として挙げ、あわせて『日葡辞書』(一六〇三―四年)の例を挙げる。「氏種姓」の例は「覚一本」
「延慶本」には例が見られない点が〈異本〉間の比較から注目される。次の用例2・3に示すように、中世後期には例がある。

2 氏も種姓もなきにより(舞の本・笈搜、新大系・三九八頁)
3 氏種性(天正十八年本節用集(一五九〇年)、書き込み例)

したがって、「屋代本」の例をもって十三世紀の例として扱うのは問題であることがわかる。これは〈異本〉成立時以降の問題として捉えることができる。〈異本〉成立時の表現だとすると、「屋代本」の〈異本〉成立時もそれほど遡るものではないことになる。

なお、天正十八年本節用集の振り仮名にある「うじしじょう【氏種姓】」の例として『日本国語大辞典 第二版』は「虎明本狂言」「浄瑠璃」の例を挙げている。

三・二 副詞「たとへ」

次に「延慶本」の事例を見る。「延慶本」には副詞「たとひ」のなかに一例だけ「たとへ」の例がある(『索引篇 下』)。

4 設院ノ昇殿スラ然也。何況於内ノ昇殿哉。(延慶本、第一本、16ウ)

「たとへ」の例は、「覚一本」「屋代本」には見られない点が〈異本〉間の比較から注目される。次に挙げるような例が「たとへ」の

例としてはやいものである。

5 湊を買たる上は、たとへ国主たる共違乱不有事（船法儀、貞徳

二年（一二三三年）三月十六日、『鎌倉遺文』三〇七二号）

6 たとへよにいてたまえとも、このほうをときたまうこと、（また）

かたし。（足利本假名書法華經、一・一一八八、元徳二年（一三

三〇年）以前書写、妙一記念館本「たとひ」（一六一頁））

7 コノモンナ、タトキウワンノサイニアウトモ、（盛久、応永三

十年（一四二三年）奥書、影印一七頁）

東京大学史料編纂所「鎌倉遺文フルテキストデータベース」によると用例5の他にも一例（三〇七二号）見られた。ともに貞徳二年成立の「廻船式目」の例であるが、実際には後世に作られた資料のようであり（『国史大辞典』「廻船式目」の項）、同種の本文を比較すると、「たとへ」の箇所は異同も多い（住田正一「一九四二」所収文献による）。したがって、「たとへ」の出現は用例6の十四世紀までくだると思われるが、室町時代に至ってもそれほど用例が拾えるわけではない。用例7は「エ」を消して「イ」とあるように、延慶本が書写された応永頃でも「たとひ」のほうが規範的な形であると認識されていたのだろう。このように「たとへ」という語形だけな

ら延慶年間の近くにまで遡るが、それでも用例4は相当はやい例と
いうことになる。

ところが、用例4は「エ」が振り仮名で示されている例で、「延慶
本平家物語全注釈」（汲古書院）には「エ」を「別筆か」とする注記
がある。巻一冒頭部分には別筆と見られる振り仮名が施されてお
り、江戸初期とする見解（『大東急記念文庫貴重書解題』）もあるよ
うに、応永書写時以降に加えられるものと考えられる。この事例は、
応永書写時以降に加えられた〈伝本〉の問題として処理することが
できる事例である。「延慶本」の〈伝本〉の言語事象には、応永書写
時に加わった可能性だけでなく、さらにそれ以降に補筆された可能
性も考慮しなければならないのである。

なお、その他の〈異本〉を見ると、「長門本」「百二十句本（平仮
名本）」に「たとへ」の例が見られる。

8 たとへ方人にて候へ、（長門本、巻八、岡山大学本32オ）

9 たとへみやこをいださる、とも、（百二十句本、京都府立資料館
蔵、29頁15行、斯道本は「タトヒ」）

用例8の他の〈伝本〉（内閣文庫蔵本・国会図書館貴重書本など）
にも、用例9の他の〈伝本〉（国会図書館本）にも「たとへ」とある

ので、これらの例は、Ⅲ（伝本）ではなく、Ⅱ（異本）の言語事象の問題と考えられる。また、「覚一本」「屋代本」「延慶本（の振り仮名以外）」という他の（異本）と比較することによって、「長門本」「百二十句本（平仮名本）」の（異本）としての新しさを示した事例と考えられる。この事例以外でも「長門本」については、室町末期から江戸初期の音韻・語法の反映を小川栄一『二〇〇九』が指摘している。

三・三 「濡れ鼠」・形容詞「のろし」

次に、「延慶本」の振り仮名以外の箇所で、『日本国語大辞典 第二版』が「延慶本」の例を初出とする語に着目する。次の「濡れ鼠」はこの箇所だけに用いられた語である。

10 石清水行幸有ケルニ、イカゞシタリケム、人長ガ淀河ニ落入テ、ヌレズミノ如シテ、片方ニ隠レラリテ、御神楽ニ参ラザリケルニ、（延慶本、三本67ウ）

「覚一本」「屋代本」には、この記事に対応する記事はあるが、「濡れ鼠」の表現はなく、他の箇所にも使われていない。「屋代本」の例のみ挙げる。

11 八幡行幸ナリケルニ、人長ノ装束持タリケル者ガ、酒ニ酔テ淀河ニマロビ入、傍ニ隠居テ御神楽遅々シタリケルニ、（屋代本、卷六、19ウ）

なお、「長門本」と「源平盛衰記」の対応箇所には次のように用いている。

12 石清水の行幸有けるに、いかゞしたりけむ、人長がよどがはにおち入て、ぬれねずみのごとくにて、かたぐにかくれいて、御神楽にもまいらざりけるに、（長門本、卷十二、岡山大学本71ウ）

13 八幡行幸有テ、臨時ノ御神楽有ベカリケルニ、人長付生ガ淀河ニ落入テ、ヌレ鼠ノ如クシテ、片方ニ隠居テ御神楽ニ参ラズ。（源平盛衰記、卷二十六、四・一二四頁）

だが、先に見たように「長門本」は後代的な要素を反映した部分があり、「源平盛衰記」もどの時点まで遡り得る資料か明らかではない。他に『伊京集』『日葡辞書』に例があるが、それ以前の資料には見当たらない。さらなる調査を必要とするが、新しい語である可能性のある事例として注意される。

次に形容詞「のろし」の例に着目する。この語も次の箇所だけに見られる語である。

14 「ヤ、梶原殿、宇治河ハ上ハノロクテソコハヤシ。……」（延慶本、五本18オ）

「屋代本」は欠巻部分なので不明であるが、「覚一本」には対応する箇所（巻九、宇治川先陣）に「のろし」は現れず、その他の箇所にも用いられていない。また、「長門本」「源平盛衰記」にも用いられていない。『日本国語大辞典 第二版』では、室町中期かとされる田中本義経記の例が挙げられているが、それ以前の資料で類例を探すのは難しい。

このように、「延慶本」には「覚一本」「屋代本」に現れない語がみられ、応永書写の（伝本）成立時のものと見てもはやい例があることがわかる。このような言語事象は安易に鎌倉時代語とすることはできず、他の資料の検討を経た上で、慎重に判断しなければならぬ。

三・四 「御＋形容詞」

最後に、「御＋形容詞」の語法に着目する。中古には形容詞に「御」

を冠することはなかったが、「覚一本」では次のように用いられている。

15 先帝のむかしもや御恋しくおほしめされけむ（覚一本、巻一、二代后）

山田孝雄「一九一四」は、「延慶本」には「御心苦し」のように名詞と複合した形容詞にはつくが、形容詞に「御」が直接した例がないことを指摘した（三九八頁）。その後、この指摘をもとに「覚一本」の例が鎌倉時代のものかどうか問題にされたが、近藤政美「一九八九」が鎌倉時代の古文書から「御＋形容詞」の実例を挙げたことによつてこの問題は「完全に終止符が打たれた」（西田直敏「一九七八」）と評されている。しかし、「御＋形容詞」が鎌倉時代に用いられていたことと、「覚一本」が鎌倉時代の資料にあつた表現をそのまま引き継いでいることは別の問題である。用例15の「屋代本」の対応箇所は次のように「御」を冠さない表現である。

16 先帝ノ昔ヲ恋シクヤ思召レケム（屋代本、巻一、17ウ）

これとは逆に、「屋代本」に「御」を冠して「覚一本」に冠し

ていない箇所もある。

第四節 「斯道本・天草版」対照研究の在り方

17 「御馮敷コソ覚ユレ」(屋代本、抜書、23ウ)

18 「たのもしうこそ候へ」(覚一本、巻七、竹生鳥詣)

「延慶本」には現れず、「覚一本」「屋代本」に異同があることを踏まえると、平家物語の「原作・原態」にあったものが「覚一本」「屋代本」に引き継がれたと考えるよりも、「御+形容詞」は「覚一本」「屋代本」の〈異本〉成立時以降の問題と考えたほうがよいだろう。

三・五 本節のまとめ

以上のように、〈異本〉間の差異に着目することで見えてくる問題もある。要するに〈異本〉間で共通しない言語事象には注意が必要で、〈異本〉成立時や〈伝本〉成立時の問題として処理し得る例があるという前提で考えなければならない。或る一つの〈異本〉をもって中世前期語の共時態を表す資料として扱うことはできないものと思われる。

天草版平家物語(二五九二年)は、中世後期の「世話にやわらげた」ローマ字書きの平家物語として日本語史の資料として貴重である。他の平家諸本と異なり、内容は簡略で、右馬の允の要望のもとに喜一検校が語る対話の形式で書かれている。語られた平家物語の内容は、語り本系の本文と似ており、「天草版」制作の際の原拠となった平家物語があったと考えられているが、原拠となった平家物語そのものは現存していない。現存諸本のなかでは、「天草版」の巻第一から巻第二の一までは、「覚一本」に「かなり近い」本文で、巻第二の二以降は「斯道本」に「極めて近い」本文(「斯道本」の欠巻部分の巻第二の九から巻第四の一は「平松本」「竹柏園本」に「近い」本文)であると言われる(近藤政美「二〇〇八」)。

原拠本に近い本文と天草版とを対照することによって、中世前期から中世後期への言語変化を示す方法は日本語史研究にとってオーソドックスな方法である。この方法は、原拠として想定された古典平家⁴が中世前期のものであるという前提に立っているが、その前提は確かなものなのか、疑ってみる必要がある。本節では、原拠本に「極めて近い」とされる「斯道本」の「天草版」に対応する巻四以降(欠巻の巻八は除く)を採り上げて検討する。

「斯道本」は〈異本〉としての「百二十句本」の〈伝本〉である。「百二十句本」は各巻十句、十二巻百二十句から成るテキストの総称で、〈伝本〉には漢字片仮名交用の「斯道本」の他に、漢字平仮名交用（平仮名本）の「京都府立総合資料館本」や「国会図書館本」などがある（ただし、「斯道本」と「平仮名本」とは本文が離れているので三・二では「平仮名本」を一つの〈異本〉として扱った。「斯道本」には識語がないが、書写年代は室町時代後期と推定されている（松本隆信「一九七〇」）。「斯道本」においても、「斯道本」という〈伝本〉成立時の言語が反映している可能性はあるだろう。以下、二つの事例を挙げて天草版と対照して検討する。

一つは、「する」意の尊敬語として用いた「めさる」という語に着目する。斯道本には用例19 aのような例がある。

19 a 「御頸只今玉ハルヘシトモ覚ヘスサウラウ。御自害ヲダニ召レ候ハ、ト申ケレハ、（斯道本、三十八句、二八四⑨、京都府立総合資料館本「御じがひだにめされ候は、」）

b 「おん首をただ今討ちまらせうずること、なかなかかひがたい。御自害をだにさせらるるならば」と申したれば、（天

草版、一三三②）

用例19 bの「天草版」では「させらるる」で対応しているところからも、斯道本の「召さる」が「する」意の尊敬語であることが確認される。しかし、この事例から中世後期の「させらるる」に対応する中世前期の表現が「めさる」だと考えることはできない。中世前期には「する」意の「めさる」は確認できないからである。「延慶本」覚一本にはこのような「めさる」の例は現れない。

中世後期になると、「天草版」（用例21）も合わせて例が見られる。

20 ツヨク謙讓メサル、ホトニ、終ニ封禪ヲハメサレヌソ。（史記抄（一四七七）、7・41オ）

21 さて退屈も召されぬおんぢや。（天草版平家物語、一〇九③）

22 ……する。意の Mexi: su（召し、す）から作られた尊敬動詞であって、動詞 Xi: suru（し、する）のもつ意味をすべてもっている。（日葡辞書（一六〇三）' Mesare: uru, eta、邦訳による）

したがって、この事例は〈異本〉成立時以降の言語事象の反映だと考えられる。

もう一つは、打消の「ん」に着目する。「斯道本」には用例23 a・24 aのような例がある。

23 a サテハ鹿ノ通ン所ヲ馬ノ通ンヤウヤ有ヘキ。(斯道本、八十
五句、五二一⑦)、京都府立総合資料館本「さてしかのかよは
んところをむまのかよはんやうやあるべき」

b さては鹿の通はう所を馬の通らぬ事があらうか？(天草版、

二六〇②〇)

24 a 組ホトニテ、人見落合テ力合ン事アラシト思テ待処ニ、(斯道
本、八十八句、五四〇④)、京都府立総合資料館本「くむほど
ならば人見おちあひてちからあはせぬ事はあらじとおもひて
まつところに」

b 組む程ならば、人見が落合はせて力を合せぬ事はあるまいと
思うて待つところに、(天草版、二七五⑥)。

打消の「ん」は「ぬ」から生じた形で、中世後期になって目につくようになる。「延慶本」「覚一本」には見られない。「天草版」には一例見られるが「しかるべからんところ」(二二八⑬)、右の例は「ぬ」が対応している。このように「斯道本」と「天草版」とを対照してみると、歴史の流れとは一致せず、「斯道本」のほうに新しい形が現れるところもある。

右の二つの事例は「斯道本」から「天草版」へとという流れを中世前期語から後期語へという時間軸で捉えようとする問題となる事

例である。このように、中世後期の言語事象が含まれていることを認識して「斯道本」を扱う必要がある。

ところで、十六世紀後半、「天草版」成立時に原拠となった平家物語を当時の人々は何のような文章として見ていたのだろうか。ロドリゲス『日本大文典』(一六〇四―八)では物語の文体を、平家物語・平治物語・太平記などの「歴史の文体」と、伊勢物語などの「草子風の文体」との二種に分けている(土井忠生訳、六六三頁)。当時の人々にとって、平家物語の文体は過去の文体ではなく、書き言葉のうちの一つの文体であった。

それでは、中世後期に物語を書く場合、どのように書いたのか。言うまでもなく、「天草版」とはまったく異なった文体で書いていた。その一例として、室町時代末期頃成立の『小敦盛絵巻』の一節を挙げる。

25 「みづからが父母と申す人は候はぬやらん。父母恋しや」とのたまひて、ふしまろび嘆かせたまふ。上人もあはれにおぼしめし、墨染の袖をしばらくたまひける。「無慙やな。汝には父母もなき捨て子にてありしを、我々養ひ育てたれば、ただわらはを父母と思ひ候へ」とぞのたまひける。(小敦盛絵巻、四三三頁)

波線・破線を付したところと同様の表現を「斯道本」「天草版」のうちを探してみると、次のような箇所がある。

26 a 「イカニ昨日ヨリ上ラレ候ト承ルニ、今マテ此フトモ申レ

候ハヌヤラン」(斯道本、百十六句、七三七③)

b 「いかに一昨日から上られたと聞くに、今までかうと申されぬぞ?」(天草版、三七五④)

27 a 女院、御櫛下サセ玉フ。御戒ノ師ニハ、長楽寺別当阿証上人

印西ナリ。御布施ハ、先帝ノ御直衣トカヤ。上人賜テ、トカ

クノ詞ハ出サレネトモ、墨染ノ袖ヲソ絞ラレケル。(斯道本、

百六句、六七七⑥)

b 女院おん髪を下ろさせらるる。おん戒の師には長楽寺の阿証上人であつた。お布施は先帝の御衣とやらであつたを上人泣く泣く賜はつて、とかくの言葉をは出だされねども、墨染の袖を絞られた。(天草版、三三二⑱)

右のように、文体の基調は「天草版」よりも「斯道本」に近いことは明らかだろう。「斯道本」のような文体は、中世後期に生産可能な文体であつたのである。一方、「天草版」をはじめとしたキリシタ人資料・抄物資料・狂言資料は中世後期の話し言葉に近い資料とし

て有名だが、これらは日本語を学ぶ場や写実的描写が求められた学問・芸能の場という特殊な環境で生まれた資料であると言える。當時の人々にとっては、「天草版」のように話し言葉に近い表現で書くことは実質でできなかったのである。

先に述べたように、「斯道本」の書写年代は室町時代後期とされるが、「する」意の「めさる」を用いた箇所は、何かの語を写し間違えたという書写時の誤写の問題とは考えにくく、新たに(異本)を作成するなかで、その当時の表現を用いて書かれた箇所だつたと考えられる。つまり、(異本)の成立が「天草版」の成立に近い時期だつたと推測される。その場合、書かれた文章をそのまま引き継いだ箇所は多いだろうが、既に中世前期に見られる表現であっても中世後期の言語意識で使用している箇所がある可能性は考慮に入れておいたほうがよいだろう。「斯道本」と「天草版」の対応箇所には、実際の歴史的な変化ではなく、同時代における文体差を示した箇所があると考えなければならないのである。このように「斯道本」を中世後期の文章と捉えることで、「する」意の「めさる」や打消の「ん」が現れることも位置づけられる。

したがって、「斯道本」と「天草版」の対照研究は、歴史的な変化を示す根拠として積極的には用いにくいのである。歴史的変化を示す際に対照研究を行う場合には、「斯道本」の言語事象が中世前期に

遡ることを示した上で、傍証として利用する程度に留めておくのが無難である。

なお、本節では「斯道本」だけを採り上げて論じてきたが、一般的には、「天草版」の巻二の「一」までを「覚一本」、それ以降を「斯道本」、「斯道本」の欠巻箇所を「竹柏園本」などを用いて「天草版」と対照している。その場合、想定された「古典平家」は質的・時代的な均一性は保証されていないことを自覚しつつ扱う必要があるだろう。

おわりに

本稿で述べたことをまとめると次の三点になる。

- 1 平家物語を日本語史の資料として扱う場合には、I「原作・原態」成立時、II「異本」成立時、III「伝本」成立時のどの時点の言語事象の問題なのか考慮する必要があること。
- 2 或る一つの「異本」をもって中世前期語の共時態を表す資料として扱うことはできず、他の「異本」での使用状況にも配慮しなければならないこと。

- 3 「斯道本」と「天草版」の対照研究によって、必ずしも日本語の歴史的变化を描けるとは限らず、同時代における文体

差の問題と見る可能性もあること。

註

(1) 山田孝雄は次のように限界を自覚している。

延慶本の価値といへども述者の目撃せるものは皆応永の復写を経更に、文政頃の転写によりて今日に伝はれるものなれば、前条推定の如く、多少の疑を挟むべき余地なきにしもあらずといへども、現存諸本中鎌倉時代の面影を伝へたりと認むべきはただこの本あるのみなれば、余輩の語法研究の資料として、之に依るの外に方途なきなり。(山田孝雄「一九二一」五二三頁)

(2) こうした試みは吉田永弘「一九九九」で行った。山本真吾「二〇一〇」の「延慶本」の言語年代を測る方法も、読み本系諸本の比較に基づいている。

(3) ただし、「覚一本」の「御+形容詞」をめぐる議論は誤読から始まっている。後世の転写の際に「御」が添加されたという説を唱えたとされる和田利政「一九六七」では、鎌倉時代後期の「とはずがたり」に「御+形容詞」が見られ、「その量は平家物語をはるかにしのぎ、おそらくまとまった数の用例をもつ作品として最も早いもの」と指摘して、とはずがたりに多く、語り本系の平家物語に少ない理由についても触れているので、「覚一本」

の例を転写の際に添加されたものとは見ていない。

〔4〕「屋代本」には数例見られる。また、「する」意の「召さる」も一例見られる。吉田永弘〔二〇〇二〕ではこれらの言語事象を「屋代本」の新しさの根拠として挙げた。

使用テキスト

平家物語諸本

延慶本……北原保雄・小川栄一『延慶本平家物語 本文篇(上)・下』(勉誠出版、一九九九再版)により、影印(『重要文化財延慶本平家物語(一〜六)』汲古書院)を参看した。

覚一本……高野本を底本にした麻原美子・春田宣・松尾葦江編『屋代本高野本対照平家物語(一〜三)』(新典社)による。

屋代本……麻原美子・春田宣・松尾葦江編『屋代本高野本対照平家物語(一〜三)』(新典社)により、影印(貴重古典籍叢刊9『屋代本平家物語』(角川書店)を参看した。

長門本……岡山大学本を底本にした『岡山大学本平家物語 二十

卷』(福武書店)により、内閣文庫蔵本の影印(藝林舎)、国会図書館貴重書本を底本とした麻原美子・小井土守敏・佐藤智広編『長門本平家物語』(勉誠出版)を参看した。

源平盛衰記……渥美かをる解説『源平盛衰記 慶長古活字版(一

〜六)』(勉誠社)による。

百二十句本(斯道本)……慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『百二十句本平家物語』(汲古書院)による。

百二十句本(平仮名本)……京都府立資料館蔵本を底本にした高橋貞一校訂『平家物語 百二十句本』(思文閣)により、国会図書館本影印(古典文庫)を参看した。

天草版……近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ編『天草版平家物語語彙用例総索引(1)影印・翻字篇』(勉誠出版)による。

舞の本(笈搜)……新日本古典文学大系(岩波書店)、盛久……表章監修・月曜会編『世阿弥自筆能本集』(岩波書店)、史記抄……抄物資料集成(清文堂)、小敦盛絵巻……室町時代物語大成(角川書店)、

『鎌倉遺文』(東京堂)、『天正十八年本節用集』(東洋文庫叢刊第十七)、中田祝夫編『足利本假名書法華經』『妙一記念館本仮名書き法華經』(勉誠社)、土井忠生・森田武・長南実編著『邦訳日葡辞書』(岩波書店)、土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』(三省堂)

文献

小川栄一〔二〇〇八〕『延慶本平家物語の日本語史的研究』(勉誠出版)

小川栄一〔二〇〇九〕『日本語史料としての長門本平家物語』(武蔵

大学人文学会雑誌 四一巻三・四)

近藤政美 「二九八九」 『中世国語論考』 第三部第一章 (和泉書院)

近藤政美 「二〇〇八」 『天草版『平家物語』の原拠本、および語彙・

語法の研究』 (和泉書院)

佐伯真一 「二九九六」 『平家物語溯源』 (若草書房)

櫻井陽子 「二〇〇二」 『延慶本平家物語 (応永書写本) 本文再考』 —

「咸陽宮」 描写記事より—— (お茶の水女子大学『国文』九五)

住田正一 「二九四二」 『廻船式目の研究』 (東洋堂)

西田直敏 「二九七八」 『展望 平家物語の国語学的研究』 (『平家物語

の文体論的研究』 明治書院)

松本隆信 「二九七〇」 『百二十句本平家物語別冊 解題』 (慶応義塾

大学附属研究所 斯道文庫編『百二十句本平家物語』 汲古書院)

山田孝雄 「二九一一」 『平家物語考』 (勉誠社再版 (一九六八) によ

る)

山田孝雄 「二九一四」 『平家物語の語法』 (宝文館復刻版 (一九七〇)

による)

山田孝雄 「二九一五」 『平家物語異本の研究』 (一) 『典籍』 二、『日

本文学研究資料叢書 平家物語』 有精堂、一九六九所収)

山本真吾 「二〇一〇」 『平家物語諸本と中世語』 — 延慶本の言語年代

をめぐって—— (神戸大学『国文論叢』 四三)

和田利政 「二九六七」 「とはずがたり」の敬語——御・形容詞・覚

え給ふ—— (『國學院雑誌』 六八巻一二号)

吉田永弘 「二九九九」 『仰せなりけるは』 考 (『國學院雑誌』 一〇

〇巻二号)

吉田永弘 「二〇〇二」 『屋代本平家物語の語法覚書』 — 書写年代推定

の試み—— (石川透・岡見弘道・西村聡編『徳江元正退職記念

鎌倉室町文学論纂』 三弥井書店)

吉田永弘 「二〇一一」 『屋代本平家物語卷十一の性格—字形と語句の

観点から』 (千明守編『平家物語の多角的研究 屋代本を拠点と

して』 ひつじ書房)

附記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究 (S) 「戦 (いくさ) に関わる文字文化と文物の総合的研究」 (研究代表者 遠山一郎) による研究成果の一部として、二〇一一年六月一日 (土) に愛知県立大学で行われた同研究費によるシンポジウム「天草版平家物語——原拠本と日本語の歴史——」で発表した内容に基づいている。